

自律的学習を促す形成的学習評価と ポートフォリオの活用

野村 和宏

1. はじめに

大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」¹には教育研究の質の向上のために「責任ある授業運営と厳格な成績評価の実施」の必要性が示されている。ここでいう「厳格な成績評価」とは単に学生に安易に合格点を与えず厳しく評価するというのではなく「評価の透明性や説明責任」を果たすことであると考えられる。

また平成28年(2016年)12月の中央教育審議会答申²では、グローバル化時代における学習指導要領の在り方を示しており、その中で各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどが求められている。具体的には、

- (1) 「何ができるようになるか」
- (2) 「何を学ぶか」
- (3) 「どのように学ぶか」
- (4) 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」
- (5) 「何が身に付いたか」
- (6) 「実施するために何が必要か」

という指針が示され、「主体的・対話的で深い学び」というキーワードが示唆するように、学びのプロセスや評価の充実を実現するための授業運営が求められている。

本稿は、こうした学びのプロセスを重視する授業運営と評価方法を外国語大学で英語を専門的に学ぶ学生のために開講されている専攻科目において、形成的学習評価とポートフォリオを活用することで実現し、学生の

¹ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm.

² 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」p.21.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf.

積極的な授業参加と自律的学習を促すことについて論じている授業実践例について論じる。

2. 授業と評価

2.1 評価のもつ意味

授業には何を指すのかという到達目標が定められる。これらを行動目標(Behavioral Objectives) あるいは指導目標 (Instructional Objectives) と呼ぶこともある。授業とはこうした目標に向かって教師と学習者が一体となって進めていく創造的活動である。そして授業が好ましい方向に進んでいるかを判断するのが評価のもつ機能である。評価は学習の成果を重視する「総括的評価(Summative Evaluation)」と学習途中のプロセスを重視する「形成的評価(Formative Evaluation)」に大別できる。総括的評価は授業の終了後に最終成績として示されるもので、小学校、中学校、高等学校でなじみのある通知簿における成績評価などが代表的なものである。また大学でも毎週の講義を聞き、学生自らがじっくりと考えを深めた上で最終の試験を受けるなど、より総括的評価がふさわしいタイプの授業もある。

一方、形成的評価は学習過程のあらゆる段階における評価ととらえることも可能で、それらが最終的に総括的評価として結実すると考えられる。この学習過程での評価としては、小テストの繰り返しなどの点数で表示されるものに加え、教師が授業の中で学習者に対して口頭で褒める、誤りを訂正するといったことも、ある意味では形成的な評価ととらえることができる。こうした学習者に対する共感的理解によっても学習者が自らの学習成果を振り返ったり、新たな学習意欲を高めたりすることができるからである。吉田他 (2018, p.179) では形成的評価について「目標に向けて学習者の学習を助け、指導の改善のために行う評価で、教員の観察、コメントや提案、エラーへの気づかせ方やフィードバック、その後の学習の改善に役立てるポートフォリオ評価などが活用できる」と述べている。さらに高本他編『英語学・英語教育研究事典』(p.368) によれば、Bloom, Hastings, & Madaus が 1971 年の *Handbook of Formative and Summative Evaluation of Student Learning* (Mcgraw-Hill) で形成的評価の意義を明確にしたとの記述があるが、大内他編『講座・英語教育工学 5 研究と評価』(1973, pp.19-20) には、それに先立つ 1965 年に L. J. Cronbach が “The New Demands on the Curriculum Evaluator” と題して Stanford University で行った講演でその重要性が強調されていたことが指摘されている。松畑 (1994, p.21) は評価のもつ本質的機能を「学習・指導の診断と促進で、学習結果の評定はむしろ

副次的機能」であるとし、さらに松畑 (1994, p.26) は「評価といえ、一定期間の学習到達度を測定・評価する総括的評価に流れすぎるきらいがあることは是正されなければならない。もっと授業中の形成的評価が重視されるべきである。」と述べている。

こうした評価をうまく組み合わせて与えることで、高本 (1980, p.36) にあるように、学習過程を確認することができ、脱落者も最小限に食い止め、大多数のものを「完全学習」に導くことが実現できるのである。

2.2 形成的学習評価を導入する授業と学習目標

本論文で扱う形成的学習評価を取り入れている授業は、公立の外国語大学で英語を専門として学ぶ学生のために開講されている専攻英語「発音」の授業である。この授業では、音声学や英語発音に関わる理論を知識として学ぶことに加え、実践としての運用力につなぐために授業の中で実際の発音練習も毎週行っている。学びながら習得していく積み上げ式の学習過程を大切にし、次の段階の学びへとつないでいくために、形成的学習評価を導入している。そしてそのシステムを実際に運用していくうえで行っているのが学習期間中数回に渡る中間成績表の返却と学生によるポートフォリオの記録という方法である。

本論文では日本人英語学習者が学ぶ英語音声についての議論は主な目的ではないが、発音授業について述べる以上、ここで触れておきたい。Kachru の示す Inner Circle、Outer Circle、Expanding Circle³のそれぞれの話者により世界中でさまざまな英語が用いられている。文部科学省による高等学校学習指導要領⁴において「現代の標準的な英語によること。ただし、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮すること」と記されているように、英語のバラエティに対する受容能力を高めることは、国際的なコミュニケーションには欠かせない。

一方、ここで述べられている「現代の標準的な英語」という文言の解釈について、『高等学校学習指導要領解説(平成 30 年告示)』外国語編・英語編には、「現在国際的に広く日常的なコミュニケーションの手段として通用している英語を意味しており、特定の地域や集団においてしか通用し

³ Crystal (2003), *The Cambridge encyclopedia of the English language*. p.107.

⁴ 『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)』第 8 節 外国語 p. 179.

ていない方言などに偏らない英語」⁵を意味するものであるという解説がある。これ以上の具体的な事例は示されていないが、実際の検定教科書編集においては、アメリカ標準英語⁶が中心となっている。O'Connor による *Better English Pronunciation* (1980) は外国語として英語を学ぶ学習者に向けたもので、概論でどのような英語発音を学ぶかについて述べている。その中でいわゆる ESL の話者は日常的に用いている英語音声でコミュニケーションができるのであればわざわざ BBC の英語などをモデルにして学ぶ必要はないが、日常的に英語を使っていない環境で暮らしているのであれば、学習上ネイティブスピーカーによるモデルが必要であるとしている (p.5)。Celce-Murcia et al. (2010, p. 11) は *Teaching Pronunciation* と題したコースブックで North American English (NAE) を中心に取り上げるとしている。その理由として北米での英語使用状況⁷と共に (3) it is a variety that has gained a strong foothold in much of the world, where English is taught as a foreign or additional language. と述べ、NAE がある意味で標準的な英語と考えられるためであるとしている。

学習者からはよく「ネイティブスピーカーのように流暢に話せるようになりたい」⁸という声を聞く。この「ネイティブスピーカー」という言葉の使用には注意が必要で、日本語のネイティブスピーカーである日本人が日本語を話す状況を考えてみても分かるように、ネイティブスピーカー全てがその言語の流暢で分かりやすい発音の話者であるということはありません。英語においても同様で、実際に英語を母語とする教師⁹であっても、特に自分の発する英語の音にこだわりがない場合など、個人的な癖が

⁵ 『高等学校学習指導要領(平成 30 年)解説』 外国語編・英語編 p. 133.

⁶ 日本の中学校向け検定教科書でもイギリス英語からアメリカ英語に英文を変えたものが 1966 年から使用が開始され、以後、アメリカ英語が日本の英語検定教科書の主流となっている。(酒井他『社会人のための英語の世界ハンドブック』 p.115).

⁷ (1) It represents our own variety and that of most of the teachers we train; (2) it is the target variety of the many ESL students living, studying, or working in North America;

⁸ 毎学期、授業を始めるにあたり学生にこれまでの発音学習の状況と目標についてのアンケートを実施している。その中で「模範的なネイティブスピーカーのように流暢に話したい」という項目をあえて加えているが、Yes, Rather Yes, Rather No, No の 4 択による回答結果、Yes を選んだ学生は 2019 年度前期のアンケートでは、2 クラス合計 72 名中の 67 名、Rather Yes を選んだ学生は 5 名となっており、全員である。外国語大学で英語を専門に学び、将来はプロとして英語を使う職業に就きたいと考えている学生も多いことがこうした高い目標設定を選んだ意識につながっていると考えられる。

⁹ 筆者が 2000 年にオーストラリアに出張した際、現地大学の外国語センター所長の教授と面会した。こちらが予想していたようないわゆるオーストラリア英語の特徴が聞かれなかったため、その点について質問したところ、「家族などと話す際にはあなたが期待しているようなオーストラリア英語で話している。一方、海外からの来客や学生と話す際には自分の発音をコントロールしている。」と答えてくれた。言語教育のプロとしてのプライドを感じさせるエピソードである。

強かったり、調音が曖昧で発音を含めた話し方が分かりにくかったりというケースもある。それらも含めてネイティブスピーカーの発音なのである。

山根(2019, p.223)は日本人のアイデンティティが感じられる程度の日本語なまりが残るのはやむを得ないが、いわゆる「日本人英語」は到達目標ではなく、あくまで発音学習の努力をした結果としての産物であると述べている。英米の標準的な英語を過度に規範化する必要はないとしても、その一方で、発声法や発音の仕方を極めたプロの声優やアナウンサーなどの話者によるきわめて明瞭で分かりやすい標準的な英語発音も現実に存在する。そしてそうした音を出すための調音法も音声学的観点からみて確実に存在する。母音、子音のそれぞれの調音における音声器官の使い方、息の流し方を正しく理解し、耳も鍛え、リズム、イントネーションといった超分節音素も含めて自分の出す音を最終的には自ら分析的に振り返ることができるようになる時、聞き手に負担をかけない明瞭な発音¹⁰を手に入れることが可能となる。

この授業は英語を専門として学ぶ学生の必修の専攻英語科目の1つであると同時に教職課程科目としても位置付けられている。将来、英語を用いる機会に自信をもって発音できること、また教師として教壇に立つ際に的確に生徒の発音指導ができることが望ましい。学生が英語の音声特徴、発音記号、音声器官の使い方を理解し、発声法を学び練習することで、英語の音声を発することを自動化し、自らのうちに内在化させ、自信を持って英語を口に出すことができるように導く。授業担当者である筆者も学習指導要領¹¹に述べられているように「まずは教師自身がコミュニケーションの手段として英語を使う姿勢と態度を行動で示す」ために、授業は冒頭の挨拶から終了まで、細かな注意点の解説を除いては基本的に英語で行うようにしている。これらの観点から、授業を通して習得を目指す発音の目標を「誰に聞いてもらっても相手に大きな負荷をかけることなく理解してもらえる明瞭な発音」とし、最終的にはそれぞれの学生が自信をもって「My English」と呼べる英語発音を確立することを目指している。

¹⁰ 明瞭性 (Intelligibility) について、Celce-Murcia et al. (2010, p. 274) は “Intelligibility does not refer to a complete lack of accent but rather an accent (which we all have no matter which variety of English we speak) that does not distract the listener. As such, intelligibility becomes a goal for all speakers of English, not just nonnative ones.” と述べている。

¹¹ 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説』外国語編・英語編 p. 127、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説』外国語編 p. 87。

3. 授業の実際

3.1 授業の概要

授業は半期科目となっており、授業回数は期末試験日を含め16回である。教科書は村田忠男・田端敏幸共著『カプセル英語発音』(新版)を用い、発展的に学習を進めようとする学生のための参考図書としてO'Connorによる*Better English Pronunciation*や今井邦彦『ファンダメンタル音声学』などを紹介している。教科書『カプセル英語発音』にはアメリカ英語とイギリス英語によって録音したCDが2枚添付されており、教科書に載っている単語や文を英米のふたつの音声で聴き比べることが可能となっている。この録音を担当したネイティブスピーカーは標準アメリカ英語とイギリス英語RPの規範的ともいえる明確な発音であり、学生が発音学習のモデルとするのにふさわしい。

教科書は24章あるため、基本的に1回の授業で2章分を扱う。表1は授業回数ごとに扱う教科書の内容と中間成績返却のタイミングを示したものである。途中第6回目、第10回目、第14回目の授業で中間成績表を印刷して返却する。第15回目には筆記試験により音声学と発音についての知識の定着を問い、すぐに採点をして第16回目の授業で最終成績表と共に返却するという授業の流れとなっている。

表1 授業回とその内容

授業回	教科書の章	中間成績返却
第1回	英語発音の諸問題、どのような英語を学ぶか	
第2回	イのグループ[i:, i], エのグループ[e, ei, eə]	
第3回	アのグループ[æ, ʌ], アのグループ[ai, au]	
第4回	アのグループ[a, a:], オのグループ[o, ɔ:, ɔi, əu]	
第5回	ウのグループ[u:, u], 弱母音[ə, i]	
第6回	破裂音[p, b], 破裂音[t, d]	第1回中間成績返却
第7回	破裂音[k, g], 摩擦音[f, v]	
第8回	摩擦音[θ, ð], 摩擦音[s, z]	
第9回	摩擦音[ʃ, ʒ], 破擦音[[tʃ, dʒ]	
第10回	破擦音[ts, dz], 鼻音[m, n, ŋ]	第2回中間成績返却
第11回	接近音[l], 接近音[r]	
第12回	[w, j, h]	
第13回	連結関連、ストレス、イントネーション	
第14回	リズム、授業のまとめ、試験説明	第3回中間成績返却
第15回	期末筆記試験	
第16回	試験、最終成績返却、発音学習を続けるために	

3.2 授業展開

授業は 90 分の時間となっており、AV 教室(CALL 教室)¹²を用いて授業を行う。幸い直前の授業時間帯に同じ教室を使う他の授業が入っていないため、教室に早めに行き、授業準備を行う。90 分の授業時間を最大限に生かすために、マスターコンソールに設置されたコンピュータの起動や教材の準備などを授業開始前に済ませ、モーツァルトなどのクラシック音楽¹³を流して落ち着いた教室の雰囲気づくりを行う。授業開始直後に宿題の答え合わせをするため、学生は授業開始時のチャイムが鳴る段階では、全員が着席して待機しているのが普通となっている。

90 分の授業は基本的に次の表 2 のように進行する。表は授業中の各活動段階のおよその配当時間を示した。授業で取り扱う内容は毎週異なるが、この授業の枠組み自体は同じである。これは学生が授業中の作業の段取りを知ること、授業をより効率的に無駄なく進めるためである。表 2 では時間の合計が 85 分になっているが、これは教室での片付け作業に必要な時間として最後に 5 分の余裕を持たせて計画しているためである。

表 2 一回の授業の進行計画

時間	活動の内容
5 分	授業開始の挨拶と授業への導入
5 分	宿題の Dictation の答え合わせと提出
5 分	出席を取り前回の録音のフィードバック返却、学生はポートフォリオに記入
10 分	発音上、注意する点を解説した後、優秀な録音を教室で再生
35 分	教科書を用いて発音についての理論を学び、発音練習を行う
15 分	録音課題に各自で個別に取り組み練習、最後に一斉録音する
10 分	今日の学びをワークシートに記入し、宿題を録音する

教科書でその日の音声を重点的に学んだ後、毎週、各自が自分のペースで約 15 分間の個別練習を行う時間を設けている。ここで扱う教材は単語レベルのものではなく、文レベルの長い素材をモデルとして練習する。Celce-Murcia et al. (2010, pp.9-19) は 10 の発音教育手法¹⁴を示しているが、その中の 6. Tongue twisters や 9. Reading aloud / recitation、10. Recordings of

¹² LL 教室はアンペール社による簡易デジタル LL の「AdiLL-100」システムである。

¹³ 主に用いるのはモーツァルトの「ハフナーセレナード K.250」。

¹⁴ 1. Listen and imitate / 2. Phonetic training / 3. Minimal-pair drills / 4. Contextualized minimal pairs / 5. Visual aids / 6. Tongue twisters / 7. Developmental approximation drills / 8. Practice of vowel shifts and stress shifts related by affixation / 9. Reading aloud / recitation / 10. Recordings of learners' production.

learners' production の方法がここで取り込まれている。同書によればこの 10 について “Audio and video recordings of rehearsed and spontaneous speeches, free conversations, and role plays. Subsequent playback offers opportunities for feedback from teachers and peers as well as for teacher-, peer-, and self-evaluation.”と説明しているように、教師による評価と共に学生同士、そして自身による評価も可能とするものである。

学生は各ブースでヘッドホンを用いてモデルの音声を聞き込んでその音声特徴を分析し、次に自分の声を録音してモデル音声と比較する。外国語学習において実際にしっかりと声に出して朗唱の練習をすることの大切さは、例えば古代遺跡を多く発掘し多言語を習得したことでも知られるハインリッヒ・シュリーマンの勉強法¹⁵にも見られる。

この個別練習中、教師はマスターコンソールからヘッドホンでモニターし、LL 装置のインカム機能を用いて学生個々に話しかけることでコメントする方法もあるが、図 1 に示したように筆者は授業中に机間巡視を行いながら練習の様子を観察し、助言の必要な学生には直接、目を合わせながら説明と助言を行う。



図 1 学生の録音練習と机間巡視指導の様子

この練習には通常 15 分ほどを与えており、ある程度練習が進んで自分の声を何度か録音して自ら聞いた後、隣の席の学生とヘッドホンを交換してお互いに録音音声を聞いてコメントをしあうという作業もしている。15

¹⁵ 『古代への情熱—シュリーマン自伝』(関 楠生訳)によれば、ロシア語を学んでいた際に朗読練習する声が大きすぎて他の間借人から家主に苦情が持ち込まれ、二度も住まいを変えたことが述べられている。(p.29)

分の練習時間が経過した後、最後の一斉録音を行う。その一斉録音した音声データファイル¹⁶を教師が回収し、USB メモリに入れて持ち帰り一人ひとりの録音された声を順番にヘッドホンで聞いて学生のワークシートにコメントを記入して評価し、翌週に返却してフィードバックする。学生は返却されたフィードバックを検討し、自分のうまく発音できている音と改善の必要な音を発音ポートフォリオ用紙に記録し、次の録音練習の際にはそうした音を意識して練習に取り組み改善を目指す。この徹底的な練習により、まずは学んだ発音を少なくとも「意識すれば正しく運用できる (consciously skilled)」の段階に高め、さらに練習を積み重ねていくことでそうした英語音声を自ら内在化、自動化し、最終的には「特別に意識しなくても正しく運用できる(subconsciously skilled)」段階¹⁷に高めていくことを目指す。

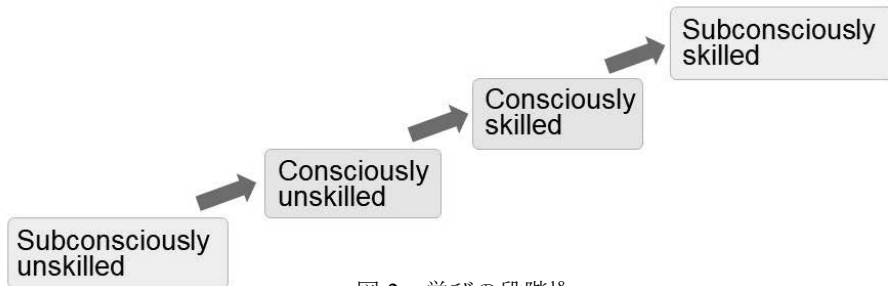


図2 学びの段階¹⁸

授業では他に、様々なネイティブスピーカーの自然な英語に慣れていくため、Dictation の宿題を毎週課している。ここで用いる音声は日本人向けに教材として作成・録音されたものではなく、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、時には日本人による英語などを素材にして、世界で話されているさまざまな英語の音声を選んでオリジナル教材を作成

¹⁶ このデジタル LL システムで用いる音声データ形式は、16bit の 22.05kHz のモノラルの WAVE となっている。そのためビットレートの低い MP3 音声のようにデジタルで圧縮した際に生じる音声劣化はみられず学生の細やかな息遣いもよく聞き取れる。

¹⁷ 門田(2014, p.160)には「『学習』と呼べるものはすべからず、最初は意識的に覚えて、その後繰り返し練習を積むことで、意識しなくてもいつのまにかできるようになる、(中略) 特にダンスなど運動に関わる潜在的知識(記憶)の獲得は、プラクティスによる自動化、無意識化を達成しないと楽しめません。」とある。外国語を話すこともまさにこの運動能力の獲得に似ている。

¹⁸ 2007 年に筆者が参加した SIT Summer Training での配布資料から作成。元の資料では“unconsciously unskilled” “unconsciously skilled”と記載されていたが、この“unconscious”という語は Cambridge Dictionary (<https://dictionary.cambridge.org/>)によれば、“in the state of not being awake and not aware of things around you, especially as the result of a head injury”と示されていることから、この図の「無意識下の」という意図を明確に示す“subconscious” (“relating to thoughts and feelings that exist in the mind and influence your behavior although you are not aware of them”)を用いた。

している。これらの英語の *variety*¹⁹をじっくり聞くことで英語を聞き分ける耳を育て、語彙力、文法力、文脈推測力などを総合的に活用して英語を文字化していく力も育てる。宿題であることから家で納得のいくまで何度も繰り返し聞くことも、不安な単語や綴りは辞書を使って確認することも推奨している。

3.3 音声録音の評価とフィードバック

ここでは前項で説明した学生が録音した音声の評価方法について述べる。学生が一斉録音した発音課題の音声を一人ひとりモニターしてワークシートにコメントを記入して評価し、翌週の授業時に返却している。評価はまずは音素の単位を基本とし、問題がない場合は○、特に良い音が出せている場合は *good*、改善が望ましい場合は△をつける。舌の位置を始めとして明らかに調音器官の用い方が不正確であることから自然でない音声となっている場合でも「間違い」というニュアンスを与える×印ではなく、「惜しい、さらに改善できる」というメッセージを伝える△印を用いることで学習に対する動機付けを失わせないように配慮している。

各音素に対する評価に加え、イントネーション、リズム、ポーズ等の超分節音素についても必要な場合には同様の記号を用いて評価する。また息の流し方など発声方法が不安定で、ぼそぼそとささやくような読み方になっている場合にも声の出し方についてコメントする。ワークシートの下には得点欄を設けており、10点満点で採点する。各得点の意味付けは次のようなものである。

- | | |
|---|----|
| • Excellent! (Yes! You've done a good job.) | 10 |
| • Very Good! (But you could still improve.) | 9 |
| • Good! (Find some points for further improvement.) | 8 |
| • Fair (Nice try, but you could be much better.) | 7 |
| • OK (Nice try, but go back and check the basics.) | 6 |
| • Try Again (You need more sincere effort.) | 5 |

¹⁹ Celce-Murcia (2010, p.276) は “when faced with the question of which accent or model we choose, teachers are encouraged to expand the focus of instruction by imagining the multiple speaking situations their learners might face in the future.” とし、続けて Scales et al. (2006, p.735) を引用し “... having English-language learners “hear, analyze, and compare key features among a variety of accents. Such an approach would address both intelligibility and listening comprehension, increasing communicative flexibility and respect for accent diversity.”” と結んでいる。

発音練習課題 William Wordsworth

課題提出日 7/4

座席番号 28

My heart leaps up when I behold,

maɪ ha:rt li:pz ʌp (h)wen aɪ bi:hoʊld

A rainbow in the sky:

ə reɪnbəʊ ɪn ðə skaɪ

So was it when my life began,

sə wəz ɪt wɛn maɪ laɪf bɪɡən

So is it now I am a man,

sə ɪz ɪt naʊ aɪ əm ə mæn

So be it when I shall grow old

sə bi: ɪt wɛn aɪ ʃal ɡrəʊ əʊld

Or let me die!

ɔ: lɛt mi: daɪ



My Learning Today (Write your learning or your questions today either in English or in Japanese)

今日で [w], 時に少しは覚めるように意識はしていましたが、今日練習しては、自分が思っているよりも両唇を接近させて保たなければいけないことがわかりました。[i]の前には [j] は、本当に難しかったです。今日の時点では正しい音が出せなかったように思います。舌の位置と、摩擦が生じるギリギリの位置という感覚を、しっかり覚える実践ができるようにしたいです。また、今日のリーディング練習で、暗い [i] がすごく苦手だということもわかりました。前回の授業で習うまで、暗い [i] の時は舌をのどにもつけないように発音してしまっていたので、それが原因だと思います。今まで、練習して正しい発音ができるようになった喜びがあるので、暗い [i] もそのように意識的に練習したいと思います。

Evaluation

- Excellent! (Yes! You've done a good job.)
- Very Good! (But you could still improve.)
- Good! (Find some points for further improvement.)
- Fair (Nice try, but you could be much much better.)
- OK (Nice try, but go back and check the basics.)
- Try Again (You need more sincere effort.)

9.5

10
9
8
7
6
5

自分の発音と比べるとかなり発音はできていて、聞いてもほぼ上で、全体も読み進めず、5分持たせると結構な時間まで進んでいて、これはかなり読み進められていて、かなりいい、頑張ってください。

図 3 録音評価を記入したワークシートの例

図 3 はワークシートの例である。授業に参加してしっかりと練習に取り組んだ上で録音した学生の音声の平均的な評価を 8 としている。さらに改善を求めたい場合はその程度により 7.5、あるいは 7 などをつける。一方、平均よりも優れた点が認められる録音については 8.5、あるいは 9 など、より上位の評価を行う。一クラス 38 人のうち、9 点を得る学生の人数は素材によって異なるが平均すれば 4 分の 1 ほどで、9 点を取った学生の録音は翌週の授業の際に教室のスピーカーを通して再生し、クラスの学生全員に披露する。使用している教室は簡易デジタル LL 機器となっており、個別のブースにコンピュータが設置されているいわゆる CALL ではないため、学生がブースでログインして自分の名前と録音ファイルの紐

づけが行われるわけではない。さらに学生の座席は毎週自由としているため、教師が学生の録音音声とワークシートを結びつけるために学生は録音時にその日の座席番号と名前をアナウンスした後、課題文を2回繰り返して録音するという方法を取っている。そのため教室で9点以上をとった学生の音声ファイルをスピーカーから再生する際には、その座席番号や名前のアナウンスも一緒に流れることからクラスの仲間に対して誰の録音であるかは自明となっている。学生は最初、自分の声が他の学生の前で流れることに恥ずかしさを感じることもあるようだが、次第に再生されることを誇りに思いそれを目指すようになってくる。また他の学生も良い録音をして教室で流してもらうことを目指してさらに積極的に取り組むようになるという相乗効果がある。これは岸本・三上(2013)が「ゲーミフィケーション」²⁰の教育への応用で示した「称賛演出」に相当する。

また図3で示したワークシート下部には学生がその日の授業の内容を自分で理解し、どのような学びがあったかをまとめて書くMy Learning Todayの欄を設けている。ここには授業時に十分に理解できなかったことについて質問を書くこともできる。教師はワークシートに寸評を記入する際に、録音音声に対するコメントだけでなく、こうした内容に対しても必要に応じて回答を記入している。なおこのワークシートは毎週、返却前に全てカラーでスキャンしておきそのPDFデータをパソコンに保存し、後日、学生からの問い合わせにも対応できるようにしている。

3.4 発音ポートフォリオの活用

前述の録音とそれに対する評価は翌週に返却するだけでは、中にはそれを一瞬眺めるだけで終わってしまう学生もいる。そうではなくこれをいかに継続的に発音練習の向上に結び付けていくか。その枠組みを述べる。

録音練習の後、一斉録音したその音声データは教師が持ち帰るが、簡易デジタルLL機能を活用して学生の個別のUSBメモリにも各ブースで練習し録音した音声データを記録しておく。そのため翌週に返却された教師からのコメントが記入されたワークシートを見ながら自分の音声ファイルを聞くことができ、うまく発音できた音声と共に改善が望ましい音声やその手がかりを得ることができる。これを視覚的に分かるように自ら記録していくのが、図4に示した「発音ポートフォリオ」のワークシートである。

²⁰ 岸本・三上(2013, p.1)ではゲーミフィケーションの要素として「達成可能な目標設定、成長の可視化、称賛演出、能動的参加、即時フィードバック、自己表現」の6項目を示している。どれも授業を活性化するために重要な要素である。

神戸市外国語大学 1年専攻英語 発音 練習記録 Portfolio

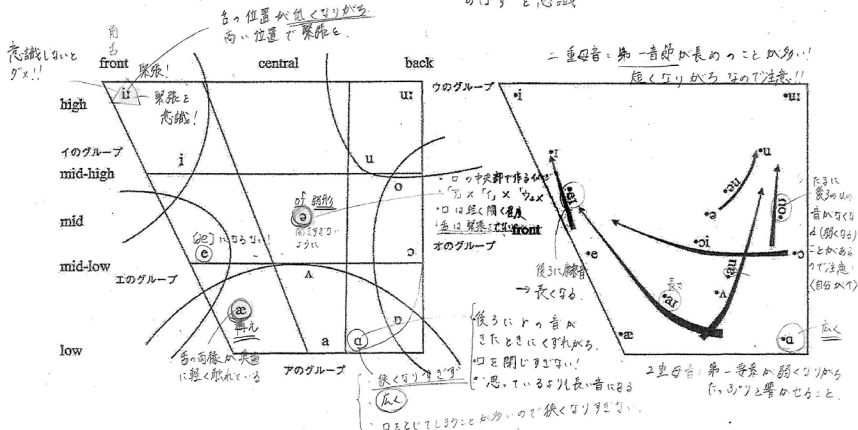
学籍番号

氏名

発音を上達させるには自分の声をしっかり聴いて、正しく発音できている音と改善すべき音を意識していくことが大切です。

◆表面は、毎時間の練習録音フィードバックの結果を、毎回それぞれの母音や子音、二重母音に◎、○、△、×などの記号やコメントを記入していきます。次週の練習の際にうまくできなかった音を意識します。改善が見られたら△→○などのように自分の進歩も分かるように記録をつけていきましょう。その他、リズム、イントネーションや声の出し方についても、指摘されたことや、気づいたことを記録しておきましょう。

●英語の母音 The English Vowels



●英語の子音 The English Consonants

	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後歯茎音	硬歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	p b			t d				k g	
摩擦音	f v	θ ð	s z		ʃ ʒ			h	
破擦音			ts dz		tʃ dʒ				
鼻音		m		n				ŋ	
接近音	w			l	r		j		

●リズム、イントネーション/声の出し方など Rhythm, Intonation, Vocal Quality etc.

語木の子音の音が少し強くなることある→リズムがくずれやすい。(1つ音は弱くなりすぎた)
 発音が苦手なところとどうでもいところを速く変えてしまうことに注意!
 文法が意識しにくいところがあるので注意!

図4 発音ポートフォリオ用紙の図

このポートフォリオには教科書から転載した子音表と母音図が示されている。学生は録音評価で○のついた音や△のついた音、それらに対するコメントなどを自らポートフォリオに記入していく。これにより毎回、発音するのに苦労している音や安定してうまく発音できている音を自覚し自ら把握できることになる。△のついている音が翌週の練習で再度出てきた場合など、特に音声器官の使い方や構え方を意識してモデルのリーディングを分析的に聞き、その後で自分の練習や録音音声を聞きこむというス

テップを経る。

第12回目の授業で録音した音声に対するコメントを記したワークシートを第13回目の授業で学生に返却するが、その結果も踏まえて学生は発音練習のプロセスを通じて得た学びについて一週間をかけてじっくりと振り返り、ポートフォリオ用紙の裏面に記入する。この Reflection を学生は第14回目の授業で提出する。図5にその例を示す。

●発音の勉強を振り返って Reflection on Learning Pronunciation

(このページは学期の最後の段階でまとめて記述します。授業の中で学んだ内容を単に表面的に列挙するのではなく、授業のそれぞれの段階で自分自身がどのような姿勢で取り組み、そこから何を得られたか。またそうした学びは自分にとってどのような意味があるのか、といった学習者本人でしか分からない学びの観点で記述しましょう。最終的な評価の対象となります。)

この授業を受ける前、私は自分の発音はきれいな方だと思っていました。1/2はともカタカナ読み(は)していいから、ネイティブの発音をよく聞いてできるだけ真似しようとしていたからです。ですが、各子音、母音の発音の仕方が細かく学び、練習し、自分の声を聞くことで、自分の発音がいかに適当であったかに気づかされ、本当にネイティブの発音が出来ようようになるには口の動かしかたや仕組みをよく理解している必要があると分かりました。授業を振り返ると、学んだ事をいくつかまとめます。まず、[i:]と[i]の違いにもあるように、今まで聞いたのを適当にまねしてれば伸ばすか伸ばさないかの差は分かりませんが実際は舌の使い方が全然違うというような事がたくさんあることです。今まで知らなくて、初めて意識するようになったこともいくつかありました。そのような事は忘れようにはできませんが、舌の感覚が覚えてしまうのが一番良いと思いました。また、発音の細かな違いをしっかりと分けるためには耳を鍛えることも大切ということでした。[o]と[ɔ]の違いなど、普段から聞いていた日本人にはかたや難しい問題ではありますが、口で発音するためにはそれを聞き分ける耳も必要だと分かりました。また、私の発音練習課題に対する先生のコメントを振り返ると、舌の緊張や摩擦が足りないという指摘が多かったです。全体的に力がゆるく、細部の力の込め方が良くはないのだと思います。読み急ぐのではなく、一声ずつ丁寧に、間も大切にしながら読み練習をしていきたいです。今回授業を通して発音の意識の仕方を学び、とても楽しかったですし、自分の話す英語を正確に相手に伝えたいという動機にもつながりました。ネイティブの発音をまねしてキレイに発音することも大切ですが、これからどんどんスラスラと話すようになる中で、自分自身の発音というものを確立していきたいと思っています。

最終的には単なる物真似ではなく My English を確立していきたいですね。そのためには様々な学び方があり、耳で聞いて真似るのは有効な方法ですが、その理論的な本があれば、より確信が持てようかなと思います。しつこく達成できなかった音も、また課題として残っている音もあるでしょう。授業で学んだことを生かして引き続き勉強を続けていきたいです Kaz

図5 発音ポートフォリオ用紙の振り返りと教員による最終のコメントの例

学生の個々の学びの振り返り記述には、それぞれ自分の発音と向き合いながら毎週一生懸命に練習に取り組んできた学生の真摯な学びの足跡が刻み込まれている。これに対しても一人ひとりにフィードバックコメントを手書きで記入し、最終の第16回目の授業で試験答案用紙、最終成績表と共に返却する。試験の問題と解答に関して解説し、学生は半期の学びを振り返る。さらに授業が終わった後も将来に向けてどのように発音の勉強を継続していくか、各自の個人目標に向けてどのように勉強していくかを考える機会を設ける。

3.5 成績評価ソフトの活用

成績は授業参加、授業中の発表や練習、宿題、期末試験のそれぞれのカテゴリの成績を元にして評価する。筆者はこの専攻英語「発音」の授業を一週間に2クラスを担当しており、学生数の合計は2クラスで70名を超える。これらの項目を効率よく的確にそして継続的に記録していくためにコンピュータによる成績処理ソフトを用いている。具体的には米国Orbis Software社のEasy Grade Proというソフト²¹で、筆者が1998年度から授業評価に本格的に導入し、途中数回のVersion Upを経て、20年以上にわたり使い続けているものである。基本となる「課題とその成績の表示」画面はコンピュータ上で次のように表示される。

St of 28 Students	ID	Overall	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	
1	74.2	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10

図6 Easy Grade Proのコンピュータ上での処理画面(課題と成績のモード)

²¹ 野村他(2001, pp.17-18)ではこのソフト選択の経緯を述べた。実際に成績処理ソフトを23種類検討した上で最も優れたものと判断して採用したものである。

図 6 はこのソフトを起動し、ある特定のクラスを選択した際に表示される基本画面である。左の縦軸には学生それぞれの名前と学籍番号、最新段階の総合得点が示される。上部の水平軸には課題がそれぞれ示される。課題追加モードにより、課題のカテゴリー、得点配分、重みづけなどを設定し、個別学生の得点を入力していくと、自動的にその段階での総合得点が計算されて表示される。一つひとつの課題項目に割り当てられるカテゴリー設定は Attendance、Homework、Performance、Test & Quiz などがあり、総合得点を計算する際の 100 点満点での重みづけ配分設定もできる。

この画面の他にも出席状況の確認のための画面もある。その画面では欠席や遅刻を EA (Excused Absence)、UA (Unexcused Absence)、ET (Excused Tardy)、UT (Unexcused Tardy)などに区別して入力できる。また実際の教室の机の配置に合わせてカスタマイズした座席表をレイアウトして印刷する機能もある。学生数は 1 クラスあたり最大 1,000 名、課題も 1 クラスあたり最大 1,000 まで扱うことができ、その他にもさまざまなカスタマイズ機能があるため、授業内容に合わせて活用できる。筆者もここで論じている以外に担当している授業によって、授業参加、宿題、クラス内活動、試験のカテゴリーの割合をそれぞれの授業に適合するように分けて設定している。このソフトを用いて毎週の学生の学習状況を継続的に記録し、表 1 で示したように学期の途中 3 回、中間成績を印刷して返却し、自分の学習状況を把握してもらう。印刷して学生に返却する成績表は次の図 7 のようなものとなる。

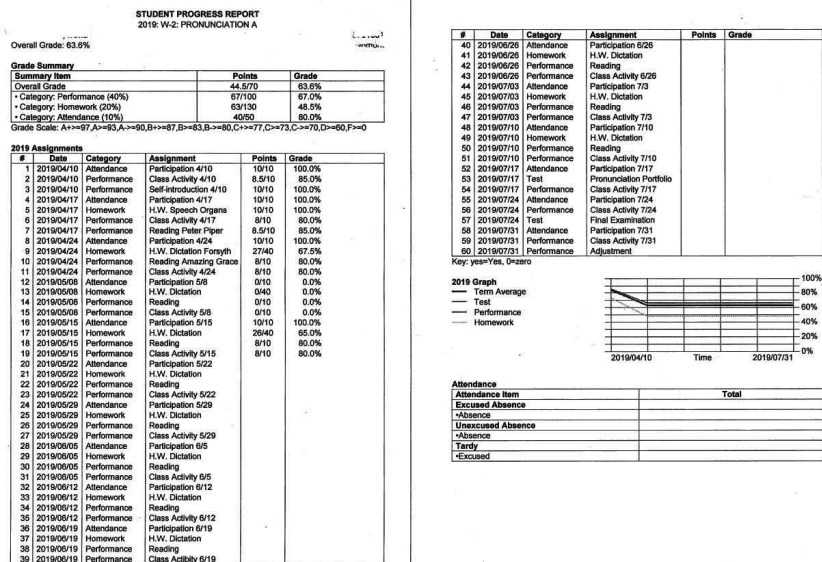


図 7 最初の段階の項目が少ない成績表のイメージ

図 7 で示したものはまだ授業回数が少ない第 6 回目の授業時に返却する第 1 回目の中間成績表のものである。この段階では学期最終段階で行う筆記テストの成績などは全く入っておらず、成績評価の項目としてスコアが入力されているのは、最初から 5 回分の授業参加、宿題、録音音声評価、授業活動の項目で、成績はそれらの総合点を 100 点とみなした場合の達成度となる。

同様に印刷した成績表は 9 回目までの授業結果を含めたものを第 10 回目の授業時に、13 回目までの授業結果を含めたものを第 14 回目の授業時に返却する。つまり授業の途中で 3 回、印刷した中間成績を各学生に示すことになる。病気で入院したり思いもかけず事故に合ったりするなどしてやむを得ず授業を欠席した場合は後日であってもその旨を連絡してもらい、excused absence として成績の調整を行う。事前にも事後にも欠席理由の説明がない場合は結果的にその日の授業のスコアは 0 点となる。当初の 5 回分の授業の間だけでも 1 回あるいは 2 回欠席する学生がいるが、授業回数が少ないだけにその欠席による成績への影響は大きいものがある。このマイナスの影響はその後、授業に継続して出席し課題をこなしていくことによって薄められていく。こうした成績評価方法について第 1 回目の授業で丁寧に説明し、具体的に中間成績表を印刷して渡すことで毎週の授業を通して積み上げていくことの大切さを実感させ、学生も安易な欠席をしなくなり、授業者と学習者双方にとって納得のいく成績評価を行うことにつながる。

第 2 回目の中間成績返却は第 10 回目の授業時であることから、授業回数の上では既に半分を超えている。最終の筆記試験は残しているものの、通常の学習内容の範囲でそれまでの学習成果と残りの授業の間に修正可能な部分を認識することができる。第 3 回目の返却は第 14 回目の授業で行う。これは第 15 回目に期末筆記試験を行う直前の返却で、筆記試験を除いた他の項目の総括に相当する成績となる。

第 15 回目の授業で行う期末試験は一週間で採点処理し、第 16 回目の最終授業において採点した答案用紙と筆記試験の点数も含めた最終成績表を印刷して返却する。次ページに示した図 8 はその最終成績表の一例で、全ての項目に対して得点が入力され、右ページには折れ線グラフで学習状況が視覚的に示される。この学生は授業の早い段階で一度欠席があり、そのことで成績が下がっているが、その後の着実な学習により総合成績を示す折れ線グラフの実線は後半に向かって上がっているのが視覚的に見て取れる。学生の中には、通常の授業で安定して高い点数を取り続けている

ても期末筆記試験の点数が十分でなく最終成績が落ち込む学生がある。反対に平常点は十分には満足のかないものであっても期末筆記試験で極めて高い点数を取ることで、最終成績を引き上げる学生もある。

いずれにしても平常の授業参加、宿題、授業活動といった積み上げ式の学習活動に、習得した理論や知識を問う期末筆記試験の結果を加えた総括としての最終成績である。着実に努力を重ねて最終的に余裕を持って 90 点を超える成績を達成する学生もいる一方、全ての授業に出席したにもかかわらず 70 点に満たない学生もいる。こうした成績は指導者側も学習者側も双方が納得できるものであることが望ましい。この方法により示した最終スコアを元に WEB 上から教務課に成績報告を行うが、成績の優れなかった学生や単位を落とした学生からも成績照会を受けたことはない。

STUDENT PROGRESS REPORT
2018: W2: PRONUNCIATION B

Overall Grade: 85.1%

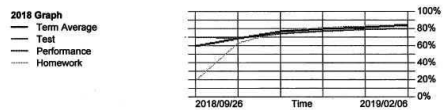
Grade Summary			Points	Grade
Overall Grade			85.1/100	85.1%
• Category: Test (30%)			224/250	89.5%
• Category: Performance (40%)			233.5/290	80.5%
• Category: Homework (20%)			374.5/450	83.2%
• Category: Attendance (10%)			150/160	93.8%

Grade Scale: A+=97, A>=93, A->=90, B+=87, B>=83, B->=80, C+=77, C>=73, C->=70, D+=60, F>=0

#	Date	Category	Assignment	Points	Grade
1	2018/09/26	Attendance	Participation 9/26	10/10	100.0%
2	2018/09/26	Performance	Class Activity 9/26	8/10	80.0%
3	2018/09/26	Performance	Self-introduction 9/26	10/10	100.0%
4	2018/10/03	Attendance	Participation 10/3	10/10	100.0%
5	2018/10/03	Homework	H.W. Speech Organs	10/10	100.0%
6	2018/10/03	Performance	Reading Peter Piper 10/3	9/10	90.0%
7	2018/10/03	Performance	Class Activity 10/3	8.5/10	85.0%
8	2018/10/10	Attendance	Participation 10/10	0/10	0.0%
9	2018/10/10	Homework	Dictation Frederick For...	0/40	0.0%
10	2018/10/10	Performance	Reading Amazing Grac...	0/10	0.0%
11	2018/10/10	Performance	Class Activity 10/10	0/10	0.0%
12	2018/10/17	Attendance	Participation 10/17	10/10	100.0%
13	2018/10/17	Homework	Dictation Preventing W...	39/40	90.0%
14	2018/10/17	Performance	Reading Theresa May ...	8/10	80.0%
15	2018/10/17	Performance	Class Activity 10/17	8.5/10	85.0%
16	2018/10/24	Attendance	Participation 10/24	10/10	100.0%
17	2018/10/24	Homework	Dictation Australian P...	37/40	92.5%
18	2018/10/24	Performance	Reading Barack Obam...	9/10	90.0%
19	2018/10/24	Performance	Class Activity 10/24	8.5/10	85.0%
20	2018/10/31	Attendance	Participation 10/31	10/10	100.0%
21	2018/10/31	Homework	Dictation Yuriko Koike	39/40	97.5%
22	2018/10/31	Performance	Reading GIVE Papa a ...	8.5/10	85.0%
23	2018/10/31	Performance	Class Activity 10/31	8.5/10	85.0%
24	2018/11/07	Attendance	Participation 11/7	10/10	100.0%
25	2018/11/07	Homework	Dictation Captain Spea...	34.5/40	86.3%
26	2018/11/07	Performance	Reading BBC Falkland...	8.5/10	85.0%
27	2018/11/07	Performance	Class Activity 11/7	8.5/10	85.0%
28	2018/11/14	Attendance	Participation 11/14	10/10	100.0%
29	2018/11/14	Homework	Dictation Letter to Pres...	38/40	95.0%
30	2018/11/14	Performance	Reading Letter to the P...	9/10	90.0%
31	2018/11/14	Performance	Class Activity 11/14	8.5/10	85.0%
32	2018/11/21	Attendance	Participation 11/21	10/10	100.0%
33	2018/11/21	Homework	Dictation Spielberg	35/40	87.5%
34	2018/11/21	Performance	Reading She sells sea...	9/10	90.0%
35	2018/11/21	Performance	Class Activity 11/21	8.5/10	85.0%
36	2018/11/28	Attendance	Participation 11/28	10/10	100.0%
37	2018/11/28	Homework	Dictation Twilight Zone	40/40	100.0%
38	2018/11/28	Performance	Reading Henry Ford	8.5/10	85.0%

#	Date	Category	Assignment	Points	Grade
39	2018/11/28	Performance	Class Activity 11/28	8.5/10	85.0%
40	2018/12/05	Attendance	Participation 12/5	10/10	100.0%
41	2018/12/05	Homework	Dictation England and ...	39/40	97.5%
42	2018/12/05	Performance	Reading Body Language	9/10	90.0%
43	2018/12/05	Performance	Class Activity 12/5	8.5/10	85.0%
44	2018/12/12	Attendance	Participation 12/12	10/10	100.0%
45	2018/12/12	Homework	Dictation Australia AB...	32/40	80.0%
46	2018/12/12	Performance	Reading William Word...	9/10	90.0%
47	2018/12/12	Performance	Class Activity 12/12	8.5/10	85.0%
48	2019/01/09	Attendance	Participation 1/9	10/10	100.0%
49	2019/01/09	Homework	Dictation A Virtual Choir	35/40	87.5%
50	2019/01/09	Performance	Reading Helen Keller	9/10	90.0%
51	2019/01/09	Performance	Class Activity 1/9	8.5/10	85.0%
52	2019/01/23	Attendance	Participation 1/23	10/10	100.0%
53	2019/01/23	Test	Pronunciation Portfolio	50/50	100.0%
54	2019/01/23	Performance	Class Activity 1/23	8.5/10	85.0%
55	2019/01/28	Attendance	Participation 1/3	10/10	100.0%
56	2019/01/30	Test	Final Examination	174/200	87.0%
57	2019/01/30	Performance	Class Activity 1/30	8.5/10	85.0%
58	2019/02/08	Attendance	Participation 2/8	10/10	100.0%
59	2019/02/08	Performance	Class Activity 2/8	8.5/10	85.0%

Key: yes=Yes, Orzno



Attendance	Excused Absence	Total
Excused Absence		
Unexcused Absence		1
Absence		1
Tardy		
Excused		
*Absence: 2018/10/10		

図 8 最後の試験を返す際に一緒に渡す最終成績表のイメージ

こうした中間成績表を活用した成績評価のフィードバック方法が学習成果の確認や学習態度の再考に役立ったかという質問に対し、過去に野村他 (2001) が行った調査では、183 名中 60.1%が「大いに役立った」、31.7%が「役立った」と答え、両方で全体の 9 割を超えた結果となったことが報告されている。このアンケート実施時に書かれた自由意見の中には「学習の不足している部分が自覚できる」「努力した分だけ成績が上がるのが実感できる」「理由が分からないまま単位を落とす心配がなくなる」「先生

が一人ひとりをちゃんと見てくれていることが分かるので信頼感がわく」
「成績評価に対する不信感がなくなった」といった形成的学習評価の教育効果を認める意見が多くみられたことが報告されている。

4 学生による授業評価

4.1 授業評価アンケートから

こうした形で行った授業に対する学生側からの評価はどのようなものなのか。毎年実施されている学生による授業評価アンケートで、当該授業の結果は次のようになっている。アンケート項目から授業の総合評価点を以下に引用する。

表3 当該授業の授業評価アンケート結果

年度	クラス	回答学生数	総合評価点 (5点満点)
2008	専攻英語 I 発音 A	42	4.7
2009	専攻英語 I 発音 B	35	4.8
2010	専攻英語 I 発音 D	36	4.8
2011年度から2013年度は校務の関係で当該授業担当なし			
2014	専攻英語 I 発音 D	39	4.82
2015	専攻英語 I 発音 B	34	4.68
2016	専攻英語 I 発音 D	34	4.91
	(2部)専攻英語 I 発音 A	29	4.69
2017	専攻英語 I 発音 A	35	4.77
	専攻英語 I 発音 D	34	4.68
2018	専攻英語 I 発音 D	35	4.63
	専攻英語 I 発音 A	37	4.97

ここに見られるように総合評価点は安定して4点台の後半を維持しており、学生から高い評価を得ていることが分かる。最も高い4.97の総合評価を得た2018年度の発音Aクラスによるアンケートの自由記述欄には37名中26名がよかった点と改善してほしい点について自由意見を書いている。書かれたコメントの一部を拾うと次のようなものがある。

- ・今まで考えたことのない細かい発音の仕方を学べた。成績のつけ方の説明があり、頑張ろうと思えた。
- ・本当に発音が上手になった。授業が楽しく、自主的に練習できる環境が良かった。

- ・一人ひとりの発音をととても丁寧に直してくれた。解説がととても丁寧。英語を使って授業をしてくれる。
- ・自分の発音を自分で確認でき、その発音に関して細かく丁寧に指摘されることで改善点が分かりやすい。
- ・教科書に書いていることだけでなく、実際にどんな舌の動きかなどを追加で説明してくれた。
- ・今までできていると自分では思っていた発音が違うことに気づけて、とても学ぶことの多い授業だと思っている。発音課題も丁寧に見てくださっているのをとても感じます。
- ・どの大学にもないとても良い授業で発音が身につく。先生がととても丁寧に分析してくれるので分かりやすい。
- ・ただ理論を学んで終わるのではなく、発音練習をし、録音した後、丁寧に評価してもらおうという徹底的な練習があった。教材もきちんと考えて使われており、様々な英語に触れて楽しめたりして、興味深かった。
- ・毎回レコーディングしたものに丁寧にコメントを書いてもらえるので、自分に足りない点がすぐに分かるのがとても嬉しい。良い点を取ると流してもらえるのは意欲が高まるので、とてもいいと思う。

ここには丁寧な授業運営の仕方について好意的なコメントが多く寄せられている。また「自主的に練習できる」「改善点が分かる」「意欲が高まる」といった積極的な学びの姿勢も現れている。

一方で改善してほしい点として述べられたコメントには次のようなものがある。

- ・課題が少し難しく、成績に反映される部分が多い。
- ・授業が半期しかない点。
- ・もう少し発音練習をする時間が欲しい。
- ・授業の進め方や方針、休んだ時どうすればよいか等を、きちんと説明できていない。8回目の授業で伝えても意味がない。

授業が半期である点はカリキュラム上、半期科目として設定されているため致し方のない点であるが、課題の難易度や練習時間配分については、貴重な参考意見として引き続き注意していきたいと考えている。また授業での欠席の取り扱いについては第1回目の授業でプリントも配布して説明し、理解が徹底できていると考えていたが、上記のコメントを書い

た学生には十分に理解してもらえるように伝わっていなかったことが分かった。この点は同年度の後期授業以降、さらに念入りに説明を行うように改善した。

4.2 ポートフォリオにおける振り返り(Reflection)から

この授業評価アンケートは授業回数全体の中で、最初から3分の2ほどの時点で行われている。そのためここでは、ポートフォリオを用いた振り返り(Reflection)を通して学んだことについての記述はほとんど見られない。一方、授業の最終段階で提出されたポートフォリオの記述を前述の発音Aクラス学生のものから拾い出すと次のようなものが見られる。

- ・この授業でしか学べないことがあり授業に集中してよかった。
- ・毎回刺激を受けて頑張ろうと思えた
- ・自分は正しく発音できていると思っていたので、発音の授業は最初、憂鬱だったが、何をどう直すべきかが分かるようになって、正しい発音を身体化していくことができた。
 - ・指摘してもらって初めて分かることもたくさんあった。考えて意識するだけで随分変わることを嬉しく感じた。
- ・自分の努力が報われた気がして自分の成長を大切にしたいと思った。
- ・その都度、向上心をもって改善に向けて努力ができた。
- ・課題はたくさんあったが単に聞いて発音するだけでは上達しないことと、意識していけば必ず改善されていくことも分かった。
- ・友だちの上手なのを聞いているとだんだん自分も負けたくないという気持ちが強くなった。その結果、努力して自分も上達していった。
- ・発音なんて学んでもそんなに意味はないと本気で思っていたが、授業を通し、今はうまくできるようになった自分をイメージしながら挑戦していきたいと思えるようになった。
- ・中学生の頃にも発音記号を習ったので簡単だろうと思っていたが、間違いだった。今までやってきたことの不十分さに気づけたことも授業を通して得られた大切なことだと思う。
- ・どんどん自分の上達を実感し、自信をもって胸を張って英語を話せるようになった。

この授業での学びのプロセスを図式化したものが次の図9である。

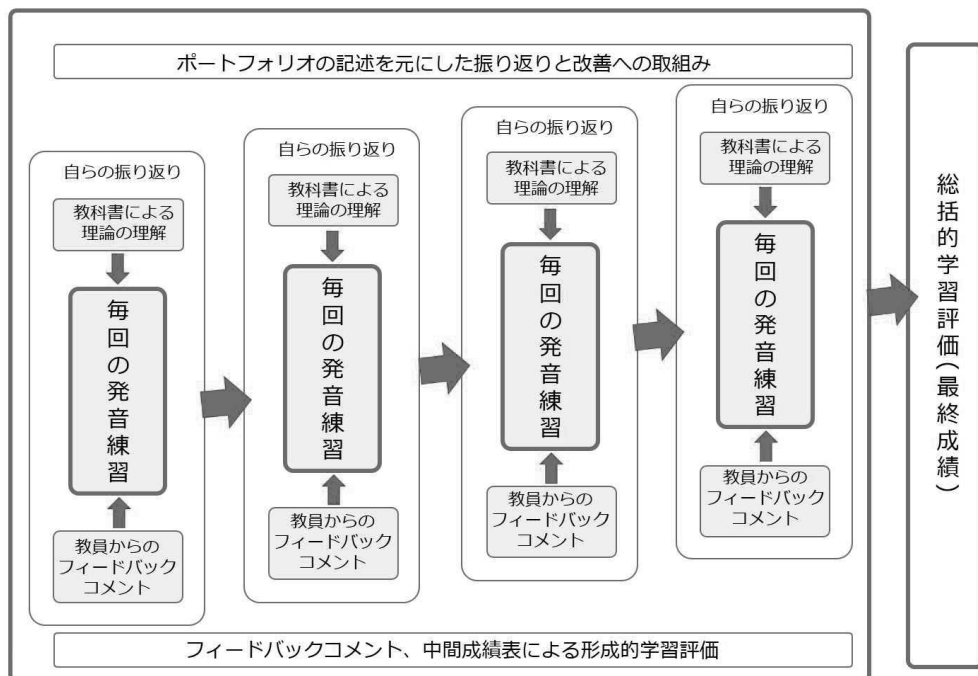


図9 形成的学習評価とポートフォリオを活用した授業のイメージ図 (筆者作成)

授業は最終的に総括的評価としての成績という数字で評価されるが、その数字には毎時間の授業における学びが集約されている。ポートフォリオの本質的特徴についてズビザレタ (2015, p.79)は「学生を省察に取り組ませ、学びについて考察することに批判的に挑戦させて、学習体験に対する考え方を一貫性のある統合した発達プロセスとして構築(そして伝達)することである。」と述べ、「このような考え方を共有することが、生涯にわたる「主体的学び」に肝要である。」と結んでいる。斎藤 (2018, p.54)が、ポートフォリオを導入した英語授業を受講した学生たちが「自分の成長過程を見ることができた」「うまくいかなかったことを書くことは自己評価に役立った」などの意見を紹介し、多くの学生にとってポートフォリオは学習を振り返り、学んだことを確認することによって、次の学習への準備を促す役割を果たすために役立っていたようだ述べているように、学習者自らが自分の学びを振り返りながら向上を目指すこと、そしてその振り返りのために教員からの適切な指導や評価が継続的に行われていくことの重要性が分かる。

5. おわりに

大学英語教育学会(JACET)に置かれた授業学研究委員会が「70字で表す<理想とする授業>」²²と題して授業学研究委員会に所属していた全国の大学教員95名の意見をまとめたことがある。筆者も当時、そのメンバーとして活動しており、そこに「学生が毎時間、期待感を持って教室に向かい、教室で共に学ぶことの喜びと意義を感じ、学習の達成感の余韻を味わって教室を離れることができる授業」と書いた。既に10年以上前のものとなったが、当時から現在に至るまでこの考えは変わっていない。

新学期に授業が始まる際、そこに集う学生たちは期待と不安で一杯である。教室という空間で外国語を専門に学ぶ学生たちが、同じクラスの仲間たちと切磋琢磨し合い安心して学べるように意識させる。既に入学段階で一定のレベルの英語力を有し、発音もコミュニケーションの手段として通じればよいという観点では学習開始段階でもほぼ問題ない学生たちがもつ、さらに高みを目指して学びたいという学習意欲にいかに応えるか、また「音声学」や「言語学」についての「講義」ではなく、「発音」の「授業」を40人近くの人数のクラスでどのように実施すればよいのか。

言葉を学び、使うという行動は本来個々人の自由意志に基づくものであるべきで、特に運動能力にも似た言葉の運用能力が伸びるのはそうした内発的動機付けに支えられていることが多いが、授業というシステムが介在する限り、まずはその外発的動機付けが個々の学習者に作用して、学生の内発的動機付けをさらに刺激するものになることが望ましい。

Crystal (2003, p.27)は「今後25年から50年の間にリアルタイムの自動翻訳が精度の面でも速度の面でも驚くばかりの進化を遂げるのは間違いない」と述べたが、既に携帯できる自動翻訳機も実用化され始めている。こうしたコンピュータ技術やAIの進歩は目覚ましく、このテクノロジーを発音教育に生かすことも考えられる。既にモデル音声の波形表示とピッチ表示を学習者によるものとを比較するシステム²³は実用化されているし、個人ユーザーレベルでスマートフォンの音声認識ソフトに語りかけて正しく意図した文を認識してもらえるか確認するなどの方法も可能な時

²² 大学英語教育学会(JACET)授業学研究委員会編(2007)『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例を中心に』pp.316-319.

²³ 音響音学分野で定評のある杉藤美代子氏による SUGI Speech Analyzer の技術を応用したアニモ社「発音学習向け音声技術・発音分析」(https://www.animo.co.jp/for_biz/pron)や国際電気通信基礎技術研究所(ATR)の研究成果と音声情報処理技術を使用して開発されたメディアナビ社による「ATR CALL 発音チャレンジ」(<http://www.medianavi.co.jp/product/atr-call-challenge/atr-call-challenge.html>)など。

代となっている。

そのような中、あえて毎週、2 クラスで 70 名を超える学生全員の音声ファイルを一つずつ聞き、毎週合計で 5 時間以上をかけてコメントを書く作業によるのは、単に上記のようなシステムが大学の教室に導入されていないという理由からではない。池澤(2009)が「デジタル化で失ったものは何か? 肉体感である。(中略) 墨や絵の具や紙を相手に絵を描くこと、数十名の演奏者からなるオーケストラを相手に指揮をすること、それに言うまでもなくスポーツのすべて、演劇、料理、旅行……まだ文化的な営みの多くは肉体の参与を求めている。」と述べているように、自らの意志で言葉を使って語ることも極めて文化的で人間的な営みである。授業で学ぶ学生たちが自信をもって My English を駆使できるようその学習を支えるためには、どうしても学習者の顔を確認しながらの細やかなフィードバックと振り返りによる学びの円環が必要となってくる。毎時間の積み重ねに対する形成的評価が蓄積されていってこそ最終の総括的評価につながっていく。形成的学習評価とポートフォリオの活用はそうした学びを支える意味をもっている。これからも毎時間、学生たちの輝く目を見て、共に学びの時間と空間を共有できることに感謝し、学生たちの成長を願って授業に取り組んでいきたい。

参考文献

Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., Goodwin, J. M. and Griner, B. D. (2010).

Teaching pronunciation: a course book and reference guide. Cambridge: Cambridge University Press.

Crystal, D. (2003). *English as a global language*. Second edition. Cambridge University Press.

Crystal, D. (2003). *The Cambridge encyclopedia of the English language*. Second edition. Cambridge University Press.

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 Retrieved April 1, 2019 from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf.

大学英語教育学会授業学研究委員会編 (2007). 『高等教育における英語授業研究—授業実践事例を中心に』 松柏社.

大学審議会答申「21 世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」 Retrieved March 28, 2019 from <http://www>.

- mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm.
- 池澤夏樹 (2009). 「終わり始まり「デジタル化で失ったもの」 肉体は悲しい...ああ」『朝日新聞』2009年11月7日.
- 今井邦彦 (2007). 『ファンダメンタル音声学』ひつじ書房.
- 門田修平 (2014). 『英語上達12のポイント』コスモピア.
- 岸本好弘、三上浩司(2013). 「ゲーミフィケーションを活用した大学教育の可能性について」デジタルゲーム学研究. Retrieved Aug. 23, 2013 from http://www.omurice.com/kissygame/130304DiGRA/gu_essay.pdf.
- 高本捨三郎編 (1980). 『英語学・英語教育研究事典』南雲堂.
- 松畑熙一 (1994). 『英語コミュニケーション能力評価事例事典』大修館書店.
- 文部科学省 (2019). 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』文部科学省.
- 文部科学省 (2019). 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説』外国語編・英語編 開隆堂.
- 文部科学省 (2018). 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説』外国語編 開隆堂.
- 村田忠男、田端敏幸(編著) (2004). 『カプセル英語発音』(新版) 三修社.
- 野村和宏、対馬輝昭、中川典子 (2001). 「大学の外国語教育における形成的学習評価とフィードバック」『流通科学大学論集—人間・社会・自然編』第14巻第2号 流通科学大学学術研究会.
- 野村和宏 (2008). 「意欲を高める評価のしかた」成田一編『英語リフレッシュ講座』大阪大学出版会.
- O'Connor, J. D. (1980). *Better English Pronunciation*. Second edition. 成美堂.
- 大内茂男編 (1973). 『講座・英語教育工学5 研究と評価』研究社.
- 酒井志延、朝尾幸次郎、小林めぐみ(編) (2017). 『社会人のための英語の世界ハンドブック』大修館書店.
- 斎藤裕紀恵 (2018). 「大学でのグローバル人材育成教育—英語教育の視点から—」中嶋嶺雄研究会(編)『グローバル人材その育成と教育革命』一般財団法人アジア・ユーラシア総合研究所.
- シュリーマン、関楠生訳(1977). 『古代への情熱—シュリーマン自伝』新潮社.
- 山根 繁 (2019). 『コミュニケーションのための英語音声研究』関西大学出版部.
- 吉田達弘 (2018). 「学習評価のあり方・進め方：目標に基づく指導と評価の一体化の実現のために」酒井英樹、廣森友人、吉田達弘(編著)『実践的英語科教育法』大修館書店.

ズビラレタ・ジョン (2015) 「ラーニング・ポートフォリオ—深い学びの」ための効果的アイデア」『主体的学び』3号. 主体的学び研究所.

Keywords: 自律的学習 形成的学習評価 ポートフォリオ 英語発音